

短 報

ヘルス・リテラシーの学習教材を用いた 図書館による市民講座の実践

藤田 寛之¹⁾ 佐藤 晋巨¹⁾ 松本 直子¹⁾ 高橋 恵子^{2) 3)} 菱沼 典子²⁾
舟田 彰⁴⁾ 小田垣宏和⁵⁾ 八重ゆかり²⁾ 廣瀬 清人²⁾ 中山 和弘²⁾
亀井 智子^{2) 3)} 朝川久美子³⁾ 有森 直子⁶⁾

Development of Presentations for Non-Medical Professionals at Libraries Using Health Literacy Learning Resources

Hiroyuki FUJITA¹⁾ Kuniko SATO¹⁾ Naoko MATSUMOTO¹⁾ Keiko TAKAHASHI^{2) 3)}
Michiko HISHINUMA²⁾ Akira FUNADA⁴⁾ Hirokazu ODAGAKI⁵⁾ Yukari YAJU³⁾
Kiyoto HIROSE²⁾ Kazuhiro NAKAYAMA²⁾ Tomoko KAMEI^{2) 3)}
Kumiko ASAKAWA³⁾ Naoko ARIMORI⁶⁾

〔Abstract〕

At St. Luke's International University, e-learning resources have been developed to promote health literacy as part of the MEXT-supported Program for the Strategic Research Foundation at Private Universities. Two related presentations were given at Kawasaki City Miyamae Library on December 3 and 17, 2015. The program involves the use of these resources with an active learning approach in which focus is moved away from lecture-style education. This promotes experience-based learning to support understanding and way of evaluation of health information using books, online resources and advertising both for individuals and for groups. This report describes the development of presentations at libraries for non-medical professionals to increase health literacy.

〔Key words〕 health literacy, health information, e-learning, active learning, library

〔要旨〕

聖路加国際大学では、私立大学戦略的研究基盤形成事業の一環で、市民向けのヘルス・リテラシー向上のためのeラーニング教材を作成し、川崎市立宮前図書館にて市民対象に2日間の連続講座を開催した(2015年12月3日, 2015年12月17日)。市民講座はeラーニング教材とアクティブラーニングの手法を用いた。講義形式を最小限に抑え、参加者が個人ワークとグループワークで図書, ウェブサイト, 広告チラシを実際に用いて健康情報の理解と評価の仕方を体験して学べる方法で実施した。本報告では、ヘルス・リテラシー向上を目指した市民講座の実践事例を報告する。

〔キーワード〕 ヘルス・リテラシー, 健康情報, eラーニング, アクティブラーニング, 図書館

-
- 1) 聖路加国際大学学術情報センター学習コミュニティ支援室・St. Luke's International University, Support Office for Learning Community, Center for Academic Resources
 - 2) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
 - 3) 聖路加国際大学研究センター PCC 実践開発研究部・St. Luke's International University, Department of People-Centered Care Practice Development, Research Center
 - 4) 川崎市教育委員会川崎市立宮前図書館・Kawasaki City Board of Education, Miyamae Library
 - 5) 墨田区ひきふね図書館パートナーズ・Sumida Hikifune Library Partners
 - 6) 新潟大学大学院保健学研究科看護学分野・Niigata University, Department of Nursing, Graduate School of Health Sciences

I. はじめに

聖路加国際大学では、2013年度から2015年度まで文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（以下、本事業）の助成を受け市民のヘルス・リテラシー向上を目指した「ヘルスリテラシー学習拠点プロジェクト」を展開した。このプロジェクトの一つとして、ヘルス・リテラシーを学習するeラーニング教材として動画教材（音声での語り付き）を作成した¹⁾。本稿ではこの教材を用いて公共図書館で行った、市民を対象としたヘルス・リテラシー向上の寄与に関する市民講座の実践について報告する。

II. eラーニング動画教材

eラーニング教材は3つのパートに分かれ、パート1：健康情報へのアクセス方法（所要時間12分）、パート2：健康情報を適切に評価できる能力（所要時間12分）、およびパート2の応用編としてのパート3：健康情報を適切に評価できる能力（応用編）（所要時間8分）の3部構成からなる。内容は、ヘルス・リテラシーの概要や情報の探し方、見つけた情報の確認ポイント、情報を正しく理解するためのポイント等を、各3分間程度のアニメーションで紹介している。

教材はインターネット上で公開し、ダウンロードに供しており、誰もがタブレットやスマートフォンで視聴可能である。音声は日本語であるが、テキストは日本語と英語を用意した。日本語音声流れる動画と、英語字幕を画面に表示させ英語母語話者などにも利用可能な動画²⁾が本学の「文部科学省 戦略的研究基盤形成支援事業2013年度～2015年度 ヘルス・リテラシーeラーニング」ウェブサイト (<http://quilt.slcn.ac.jp/HLproject-1/materials/>) に公開されている。また教材を収録したDVDを作成し、画像および教材テキストを印刷した冊子も作成した。本報告の市民講座もこのDVD版を使用した。

III. 市民講座

「健康情報の『目利き』になりましょう！」

1. 市民講座プログラムの検討

市民を対象とした市民講座の適切な開催方法、動画教材を活用したアクティブラーニングの可能性、そしてヘルス・リテラシー向上のための方略としての動画教材について助言を得ることを目的として、市民講座プログラムの検討会を市民講座開催前後に3回設けた。プログラムの検討作成にあたっては、市民を対象とした講座の開催経験を豊富に持つ2名の専門家を学外アドバイザーとして招いた。学外アドバイザーには、地域の図書館が地

域に合った市民講座をつくるための効果的かつ適切な参加者募集方法や講座内容の他、市民講座のプログラム内容について、グループワークの手法等の助言を受けた。プログラム検討会で適切な市民講座の開催案内の方法、講座の内容、開催方法を検討したうえで、市民講座の開催プログラムを作成した（表1）。

市民講座のプログラムを検討する段階で、市民講座のタイトルには当初「ヘルス・リテラシー」という言葉を用いる予定であった。しかしこの言葉は一般的ではなく、市民には分かりにくいという指摘が市民代表のメンバー内からあった。そこで「健康情報の『目利き』」と表記し、市民講座の名称を「健康情報の『目利き』になりました！」とした。

また市民講座のプログラムは、講義形式を取ったものの、講師から参加者へ一方に情報を伝達するのではなく、参加者が個人あるいはグループで健康情報の評価等を体験して学べるよう、アクティブラーニングの時間を多く確保するようにした。アクティブラーニングの時間を多くすることで、講座を聴講してヘルス・リテラシーの考え方を知るだけでなく、講座で知り得た知識や情報を実践でどのように使えばよいか、参加者に体験を通して学んでもらうためである。そのため、本事業で作成した動画教材から、各回の講座の目的にあった動画教材に限定し、選択して利用することにした。

2. 市民講座の開催

市民講座は2回開催の連続講座で2日間行った。講座は1日1回の開催とし、受講対象者は、会場となる川崎市立宮前図書館のある川崎市に在住あるいは在勤の方で、2回開催する講座に両日とも参加できる方を募集した。アクティブラーニングを行うことから20名を参加定員とした。開催案内の掲載先として、川崎市のホームページの他、区報やタウンニュースに開催案内を掲載することとなった。参加者募集の案内は2015年11月中旬より、川崎市ホームページ、ポスター掲示等で開始した。ホームページの掲載は川崎市立宮前図書館、川崎市教育委員会で行った。ポスター、チラシは川崎市立図書館の他、市民館と保健所にて配布した。また、川崎市のタウンニュース等にも講座開催を告知した。結果、参加申込者数は第1回目の市民講座は15名、第2回目の市民講座は19名あり、うち第1回は14名、第2回は17名の参加であった。なお出席者の中にはヘルス・リテラシーの講座開催に関心をもつ公共図書館員3名もいた。

3. 第1回市民講座プログラム

第1回目の市民講座は、健康情報へ適切にアクセスするための確認点を学ぶことを目標とした。動画教材の「パート1：健康情報へ適切にアクセスできる力」の中か

表1 市民講座「健康情報の『目利き』になりましょう！」プログラム

第1回：まず「情報」見てみましょう！
日 時：2015年12月3日(木) 14時～15時半

時間(分)		内 容
5	個人作業	関心がある、読んでみたい本を1冊以上選ぶ
10	個人作業	各自でワークシートに書誌事項、本を選んだ理由、印象等を記入
10	動画教材の視聴 講師の補足説明	動画「いなかもちで健康情報を確認する その1、その2」
15	個人作業	ワークシートに選んだ本について記入する
	グループ作業	お隣同士で気づいたこと、考えたことを話し合う
10	グループ作業の共有	ワークシートを元に「いなかもち」の確認と解説
8	動画教材の視聴 講師による補足説明	動画「ヘルス・リテラシーを身につける」
10	講師説明	第2回の予定と課題確認

第2回：情報をしっかり理解しましょう！
日 時：2015年12月17日(木) 14時～15時半

時間(分)		内 容
20	講師説明	第1回の「いなかもち」を解説
	個人作業	ウェブサイト(図)を「いなかもち」で確認
	グループ作業	お隣同士で確認
	講師説明	「いなかもち」をウェブサイトと本の場合を比較しながら確認
15	個人作業	各自で持ち寄った広告あるいはウェブサイトの信頼できそうと思う部分、怪しいと思う部分、怪しい情報を確かめる方法について考えワークシートに記入
	グループ作業	お隣同士で気づいたこと、考えたことを話し合う
	共有	グループ作業で話し合ったことを教えてもらう
17	動画教材の視聴	動画「情報を正しく理解する」 動画「全体の数を意識する」 動画「いくつかの原因を考える」 動画「比較して考える」 動画「物事の両面を考える」
20	講師説明	ポイントをウェブサイトを確認 身近な図書館等で調べられる情報源を紹介する
	グループ作業	紹介された資料を使う順に並べ替える 配布した図書について理由を考えながら探す順に並べ替える

ら、情報の評価点を紹介した「いなかもち」の動画2本と、ヘルス・リテラシーに関する動画1本¹⁾を用い、本学の講師が動画内容の解説及びヘルス・リテラシーを学ぶための要点を説明した。「いなかもち」は教材の中でヘルス・リテラシーを分かりやすく理解してもらうために使用されているキーワードである(「い」- どの情報か、「な」- なんのためにその情報は発信されているか、「か」- 書いた人はだれか、「も」- 元ネタは何か、「ち」- 違う情報と比べたか)。

会場には事前に医療や健康に関わる図書館の蔵書を100冊程度準備した。参加者には動画教材を視聴し、ヘルス・リテラシーを学ぶ前に、準備した図書の中から自分が関心のある本、読んでみたい本を一人1冊以上選択し、選択した図書が健康情報として適切かどうかを自ら考えてもらった。その後、動画教材でヘルス・リテラシーについて学んだ後、自分が選択した図書について「いなかも

ち」の観点から健康情報として適切かどうかを見直す作業をした。また、個人で「いなかもち」について理解した後は2～3人程度でグループを作成してもらい、自分が選択した図書とヘルス・リテラシー(いなかもち)への理解について意見交換を行った。はじめは講師と参加者とのやり取りのみで行っていたが、自ら学び、考え、共有する時間帯を導入したことで、活発な意見のやり取りを生むことができた。このようなグループワークの後、講師が改めて情報に対するヘルス・リテラシーの説明を行った。

4. 第2回市民講座プログラム

第1回から2週間後に行った第2回目の市民講座では「情報をしっかり理解しましょう！」をテーマに、より深く情報を理解するためのポイントについて学ぶことを目的とした。動画教材は「パート2：健康情報を適切に評

価できる力」の中から、「情報を正しく理解する」「全体の数を意識する」「いくつかの原因を考える」「比較して考える」「物事の両面を考える」の動画5本を用いた¹⁾。

第2回目の市民講座ではアクティブラーニングを2つの場面で取り入れた。

1つ目はウェブサイト及び新聞やチラシ等の広告と、図書の「いなかもち」の違いである。ウェブサイトは「ヘルスリテラシー学習拠点プロジェクト」で教材として作成したサプリメント広告³⁾(図)を用いた。また第1回目の講座参加者には、健康に関する新聞広告、チラシ等を持参するよう呼びかけた。これらを元に、参加者同士で広告のコピーや記載情報等の身近な健康情報について、信頼できる点や疑わしい点を考えるグループワークを行ってもらった。その後、健康情報の評価を紹介した動画教材を視聴し、もう一度同じ広告を見直して、グループで意見交換を行った。

2つ目は、参加者が自分に身近な図書館で調べることができる健康情報、情報源をそれぞれ紹介する場面を想定したグループワークである。事前に、骨粗しょう症、肺がん、大腸がん、肺炎を主題とした図書を、各病気ごとに4～5冊予め用意し、各テーマ(病気)の図書を1つのセットとした。各テーマの図書は、病名を知るための一般的な書籍から、治療に関する専門書やガイドラインを用意し、同じテーマ(病気)について書かれているが、利用対象者が異なるように選択した。参加者を少人数のグループにいくつか分け、各グループに1つのテーマの図書のセットを配布した。グループ内でそれぞれの図書の利用対象者や用途を確認し、各々図書資料の特徴、調べる順序を確認する作業を行ってもらった(写真)。

5. 市民講座のアンケート結果

各回の市民講座終了時に、参加者に無記名自記式アンケートへの回答を依頼した。回収数は第1回14名、第2回16名であった。参加年齢層は60歳代が5名(第1回5名(35.7%)、第2回5名(38.5%))と最も多かったが、20歳代から80歳代まで幅広く、性別は女性が多かった。職業は主婦(主夫)が第1回8名(57.1%)、第2回11名(68.8%)であり回答者の半数を上回った。

講座の開催時間、説明の分量について、「講座の開催時間の長さは適切」との回答は第1回12名(85.7%)、第2回13名(81.3%)であった。「講座全体の量は適切」は第1回10名(71.4%)、第2回13名(81.3%)であり、「講座で見たビデオはわかりやすかった」は第1回13名(92.9%)、第2回16名(100%)であった。動画教材の講師による補足説明は、全員が「ビデオを補足して有効」であったと回答した。

市民講座で行ったアクティブラーニングの実施は9割以上が「ビデオを補足して有効」であった。また今回の

図 教材用ダミー広告サイト



写真 第2回市民講座「情報をしっかり理解しましょう！」

ヘルス・リテラシーに関する「『情報の目利き』になる講座」を図書館で開催することについては全員が「適当」であるとの回答結果であった。「講座全体として満足」「ほぼ満足」と答えた人を合わせると、第1回12名(85.7%)、第2回16名(100%)であった(表2)。

6. 市民講座プログラムの振り返り

各市民講座の開催後には、本講座の実行メンバーの他、学生スタッフ、プログラム検討会の学外アドバイザー、そして医療・健康情報の提供に関心のある公共図書館員を交え、振り返りの会を持ち、当日のプログラムの様子を振り返りつつ、市民がヘルス・リテラシーを身につけること、ヘルス・リテラシーに関する講座を公共図書館で開催すること、またヘルス・リテラシー教材として本事業で作成した動画教材について意見交換を行った。

プログラムの内容については「90分間で実施する講座にしては内容が多かった」といった、伝える内容がやや多いとする意見がある一方で、「『いなかもち』だけでなくより深く『情報をしっかり理解するための4つのポイント』が出てきて腑に落ちた」といった意見や、「健康情報に関する講座であればEBMやガイドラインの話をも

表2 市民講座アンケート結果

● 講座の開催時間の長さは		
	第1回 (N=14)	第2回 (N=16)
長かった	1	0
短かった	1	3
適当	12	13
● 講座全体の量は		
	第1回 (N=14)	第2回 (N=16)
盛り込みすぎ	1	0
適当	10	13
物足りない	3	2
無回答	0	1
● 講座で見たビデオは		
	第1回 (N=14)	第2回 (N=16)
わかりやすかった	13	16
わかりにくかった	0	0
無回答	1	0
● 講師による補足説明は		
	第1回 (N=14)	第2回 (N=16)
ビデオを補足して有効	14	16
ビデオだけで理解できるため不要	0	0
● 講座で行った実習は		
	第1回 (N=14)	第2回 (N=16)
ビデオを補足して有効	13	15
ビデオだけで理解できるため不要	1	1
● 図書館で「情報の目利き」になる講座を開催するのは		
	第1回 (N=14)	第2回 (N=16)
適当	14	16
不適当	0	0
● 講座全体として		
	第1回 (N=14)	第2回 (N=16)
満足	5	10
ほぼ満足	7	6
やや不満足	2	0
不満足	0	0

う少し詳しく追加してもよいのではないか」というような、内容にさらに盛り込むべき提案があった。また別の地域や対象者で同様の講座を開催する際は、地域性や参加者の特性に合わせた内容にすべきとの意見もあった。

学習方法としてアクティブラーニングを用いたことについては「講義形式ではなくグループワークを用いたことで参加者同士が交流でき、他の人の意見を知ることができてよかった」、「講義形式だと聞くだけになるので理解しにくい。実際に健康情報を評価する作業をやったことがよかった」という評価がされた一方で、「アクティブ

ラーニングによる学習に慣れていない方も参加しやすい工夫が必要」、「講座開催案内に講義形式ではなく、グループワーク等を実施することを案内すると事前に心積もりができるのでよい」という意見もあり、グループワークに慣れていない方への支援や、事前にアクティブラーニングの学習方法についても案内するべきだという意見が出た。

動画教材に関しては「登場人物の語りかけが親しみやすく、よく言いがちなセリフが出てきてよかった」、「情報の裏付け、エビデンスが紹介されていてよかった」、「動画教材で取り上げる題材が骨粗しょう症と具体的であるのがよい。動画教材の骨粗しょう症を自分の気になる病気に置き換えて応用しやすい」、「動画教材を用いたことでヘルス・リテラシーの理解が深まったように感じた」といった評価があった。反面、動画教材の改善すべき点として「セリフの速度がやや早いので高齢者を対象とした講座で教材を用いる場合は補助資料の配布、動画の途中で補足説明をするなど工夫が必要ではないか」といったプログラム進行に対する改善や、「複数の動画を続けてみる場合、BGMが毎回同じで単調である」といった教材内容についての改善点も挙げられた。

また「公共図書館でDVDにした動画教材を提供することは市民のヘルス・リテラシー向上に有効である」、「公共図書館は寄贈資料が多く寄せられるため、広く配布すると寄贈資料の1つとして埋もれてしまう場合がある。健康情報サービスに力を入れている図書館を対象にDVDを提供すると適切に市民に提供される可能性が高い」といった、動画教材をインターネットで公開するだけではなくDVDにしたことについて、インターネットを使えない高齢者に対して、DVDという形で教材を提供するのは有効であるとの意見が挙げられた。図書館を会場としたことについては、「このような講座は図書館の利用者にとってコミュニケーションの場にもなってよいと思う」、「公共図書館では医療情報が求められている。図書館として、資料を通じて健康情報について発信できると感じた」という評価を受けた。

IV. 市民講座の今後の可能性と課題

図書館での市民講座実践にあたり、今後、ヘルス・リテラシーの講座を行う可能性について、以下の示唆を得た。

本講座で用いたeラーニング教材である動画教材は、中高年層を対象として開発した教材ではあるが、ヘルス・リテラシーは年齢層を問わないテーマであり、動画教材の使い次第で多くの対象者が利用できるだろうと評価された。

また公共図書館ではヘルス・リテラシーに関心が高く、

市民へ学習機会の提供を検討している図書館があることが分かった。

さらに福祉施設、老人施設、消費者センター等、地域の施設と連携して教材を活用する機会を増やすことは、元々ある地域のつながりを活かせるため有効ではないかとの示唆を得た。そのため、市民に身近な公共図書館と協力することで動画教材の一層の活用が見込まれる。また、このような講座を開催する講師、ファシリテーターといった、人材の育成も必要である。

引用文献

- 1) 聖路加国際大学. 聖路加国際大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業. [参照2016-10-28].
<http://quilt.slcn.ac.jp/HLproject-1/>.
- 2) 聖路加国際大学. 聖路加国際大学 WHO プライマリーヘルスケア看護開発協力センター. [参照2016-10-28].
<http://university.luke.ac.jp/who/documents/index.html>.
- 3) 聖路加国際大学. 聖路加国際大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業ヘルスリテラシー学習拠点プロジェクトリテラシー調査. [参照2016-10-28].
<http://quilt.slcn.ac.jp/HLproject-1/hl-survey/>.